

中山間地域に住む高齢者の暮らし —岡山県高梁市宇治町の事例（その2）—

野 邊 政 雄

The Lives of Japanese Elderly Women in a Mountainous Area:
The Case of Uji Town in Takahashi City, Okayama Prefecture—Part II

Masao NOBE

要 旨

本稿では、中山間地域にある農村である岡山県高梁市宇治町に住む高齢者の暮らしを紹介した。宇治町内には商業施設や生活関連施設がとても少ないけれど、多くの高齢者が住み続けている。近年、過疎化と高齢化がいっそう進行している。そのために、従来のやり方では宇治町の住民の生活を維持することがむずかしくなった。そこで、住民は宇治町の運営方針の変更をすることによって、暮らしを存続させようと努めている。それに加えて、別居子の居住場所に注目した。宇治町には単身や夫婦のみで生活をしている高齢者が多いけれど、そうした高齢者の子どもは少なくとも1人が40キロ以内の場所にたいてい住んでいた。高齢者はそうした子どもから支援を受けやすいから、住み続けることができた。

キーワード：中山間地域、高齢者、過疎化、高齢化、別居子

はじめに

紀要の前号に「中山間地域に住む高齢者の暮らし—岡山県高梁市宇治町の事例（その1）」を掲載し、高梁市宇治町の高齢者の暮らしを紹介した。本稿は、その後半部分である。そのために、節・表・写真の番号は前号からの連続となっている。

5 高齢者の暮らし

5.1 高齢女性の自動車の運転

宇治町では、60歳代や70歳代の高齢男性の大部分は自動車を運転するから、買い物や病院・診療所への通院に支障はない。これに対し、高齢女性は必ずしもそうでないので、高齢女性が自動車を運転するかどうかを見ておく。

1997年から98年に、筆者は宇治町で65歳から79歳までの女性に調査を実施した。その時は、自動車を運転できる高齢女性はいなかった。彼女たちが若かったとき、女性が自動車の運転をするのは危険だと夫や夫の両親に反対されて、運転免許証を取得できなかったからである。そのために、当時、高齢女性は買い物や病院・診療所へ通院のために移動することが生活上で大きな問題であった。

2016年から2017年に実施した「宇治町調査」では、自動車を運転する高齢女性は65.2%であり、自動車あるいはバイクを運転する高齢女性は73.9%であった。ただし、自動車を運転すると回答しても、高齢女性は遠方にまで自動車で行くわけではなく、運転し慣れている高梁市内を買い物や通院のために運転しているだけであった。

5.2 食料品の調達方法および病院・診療所への通院方法

宇治町での生活で必須なことは、食料品の入手である。さらに、多くの高齢者は何らかの病気にかかっているから、定期的に医者や診療を受けなければならない。しかし、宇治町には、商店が1軒しかない。また、医者は月に2回地域市民センターに来て2時間診療するだけで、専門的な治療ができない。そこで、「宇治町調査」で、筆者は高齢女性に食料品の調達方法および病院・診療所への通院方法についての質問を尋ねた。これらの質問は、選択肢の中から複数の

項目を選択できるということでおこなった。その結果を提示しておく。

まず、食料品の調達方法である。「最近の3ヶ月、食料品の買い物をどのようにしたか」の質問への回答(表3)で最も多かったのは「自分で自動車・バイクを運転して、買い物をした」(63.8%)であり、次に多かったのは「同居している家族員(夫、子ども夫婦、孫)が運転する自動車に乗って行った」(47.8%)であった。「生協による自宅への配達」(43.5%)という回答も比較的多かった。他方で、「地元の商店で購入」したのは26.1%にすぎなかった。「業者の移動スーパーで購入」「農協の移動販売で購入」「生協による自宅への配達」のいずれかの方法で食料品を調達した回答者は、58.0%であった。

表3 宇治町に住む高齢女性の食料品の

調達方法	(単位:%)
調達方法	割合
地元の商店で購入	26.1
近所に来る移動販売で購入	
業者の移動スーパーで購入	14.5
農協の移動販売で購入	17.4
生協による自宅への配達	43.5
地域の外に行って、買い物	
自分で車・バイクを運転し、	
買い物をした	63.8
バス・タクシーに乗って行き、	
買い物をした	8.7
他者の運転する車に乗せてもらい、	
地域外で買い物	
近所の人が運転する車に乗せて	
いってもらった	10.1
同居家族員が運転する車に乗って	
行った	47.8
別居する子ども夫婦や孫が運転す	
る車に乗って行った	7.2
高齢女性の代わりに、他者が地域外で	
購入	
近所の人が代わりに買い物	1.4
別居する子ども夫婦や孫が代わり	
に買い物	2.9
同居家族員が代わりに買い物	18.8

(注)69人の回答者のうち、それぞれの調達方法を選んだ回答者の割合である。複数の選択肢を選ぶことができるとして、調査した。

次に、病院・診療所への通院方法である。「最近の3ヶ月、地区の診療所以外の病院や診療所にどのように行ったか」の質問への回答(表4)で最も多かったのは「自分で自動車・バイクを運転して、通院した」(59.4%)であり、次に多かったのは「同居家族員が送迎」(40.6%)であった。「バス・タクシーを利用」(13.0%)という回答は、それらよりもかなり少なか

った。大部分の高齢女性は地域外の病院や診療所に通院しており、「地域の外の病院や診療所に行ったことがない」のは4.3%にすぎなかった。

表4 宇治町に住む高齢女性の地域外病院・診療所への通院方法 (単位:%)

通院方法	割合
自分で車・バイクを運転	59.4
バス・タクシーを利用	13.0
近所の人や親族が送迎	5.8
同居家族員が送迎	40.6
別居する子ども夫婦・孫が送迎	7.2
地域外の病院・診療所に行っていない	4.3

(注)69人の回答者のうち、それぞれの通院方法を選んだ回答者の割合である。複数の選択肢を選ぶことができるとして、調査した。

このデータを分析したところ、次の3点が分かった¹⁾。第1に、高齢女性は自分で自動車を運転できれば、自分で自動車を運転して買い物や病院・診療所への通院をしていた。自動車を運転できず、同居家族がいる場合は、同居する子ども夫婦や孫が高齢女性を送迎していた。自動車を運転できず、同居家族がない場合は、高齢女性はバスやタクシーを利用していた。第2に、別居している近親者は高齢女性の送迎をあまりおこなっていなかった。第3に、高齢女性は自動車を運転することと近親者と同居しているかとはかかわりなく、「業者の移動スーパーで購入」「農協の移動販売で購入」「生協による自宅への配達」のいずれかの方法で食料品を調達していた。

食料品の購入や病院・診療所への通院をするとき、多くの高齢女性が自ら自動車を運転していることが多いことから、宇治町で生活をする上で、自動車を運転できることがとても重要であることが分かる。自動車を運転する高齢女性は自由に移動できるから、好きなときに買い物に行くことができ、病院・診療所に通院ができる。そこで、そうした高齢女性は宇治町に住むことに何ら不便を感じないと言っていた。ただし、年齢を重ねて自動車を運転しなくなったら、生活が不便になるだろうとも語っていた。これに対し、自動車を運転しない多くの高齢女性は、宇治町での生活が不便だと言っていた。

5.3 高齢者が一緒に働く集団

宇治町には、高齢者が生きがいのために一緒に働く集団がある。1つは「宇治雑穀研究会」というもち麦を栽培する集団である⁽¹⁾。この集団は2012年に結成され、2020年現在27人の会員がいる。会員の平均年齢は70歳である。宇治町に多くの耕作放棄地があるが、研究会は耕作放棄地を借りて、もち麦を栽培してい

る。さらに、もち麦粉、もち麦茶、もち麦を使った菓子などの製品を開発し、製造している。そして、もち麦やその製品を高梁市内のいろいろな店で販売している。もち麦栽培は、高齢者の生きがいを作り出しているだけでなく、耕作放棄地の解消や地域活性化にも役立っている。2017年から、研究会はもち麦を使った地ビールを製造・販売するようになった。さらに、2019年から、宇治町の中心地区で食堂を毎週月曜日に開き、もち麦を使った昼食を提供している。

もう1つは、宿泊施設を経営する集団である。かつては庄屋の屋敷であった建物が宇治町の中心地区にあり、高梁市役所がそれを所有している（写真7）。住民の集団がその屋敷を1994年から借りて、旅館として経営している。都会に住む人は田舎暮らしを楽しむために、その旅館に宿泊してゆく。宿泊客はそれほど多くなく、宿泊客がいるときだけ、営業している。7人の高齢者が働いている。高齢者は、自分の体力や都合に合わせてそこで働くことができる。



写真7 旅館として使われている元庄屋の邸宅

これらの集団で注目に値するのは、60歳代や70歳代の女性がリーダーとなって、活躍していることである。宇治地域市民センター職員の中曾まゆみ氏によれば、宇治町では、次のような経緯で、女性が地域のリーダーとして活躍するようになったという。1990年に宇治中学校が閉校になったが、高梁市役所がそれを提案したとき、宇治町の住民は反対運動をおこなった。反対運動をおこなう中で、住民の団結する機運が強まり、地域に貢献したいという住民が増えた。こうした土壌があったので、リーダーシップや企画力を持った女性が宇治町で事業の提案をしたときでも、他の住民がそれに賛同したり、係わったりするようになった。こうして女性がリーダーとして活躍するようになった。宇治中学校の閉校反対運動をした女性たちは、今は高齢女性となっている。宇治町のように、女性が近

年リーダーとして活躍する事例は、他の農村においても報告されている²⁾。

5.4 高齢者のための集会や集団

宇治町には、高齢者の娯楽や交流のために、いくつもの集会や集団がある。まず、「宇治カフェ」である。宇治町全体の住民を対象に、宇治カフェが地域市民センターで毎週木曜日に開かれている。将棋、囲碁、脳トレ（脳を鍛えるためのゲーム）などのゲームをしたり、体操をしたり、料理を作ったり、パソコンを習ったりする。さらに、後期高齢者の女子会のような、参加者が希望する活動をすることもできる。

次に、町内単位では、「ふれあいサロン」がある。宇治町は30の町内から構成されているが、そのうち5の町内でふれあいサロンが開かれている。高齢者などが集まってさまざまな活動をして、交流する。お茶を飲みながら、連絡事項を聞いたり、趣味の活動をしたりする。恵方巻を作って、高齢者の家に持ってゆき、そのときに安否確認をするといったボランティア活動をする町内もある²⁾。

それから、「ミニデイサービス」である。ミニデイサービスはもともと介護認定を受けていない元気な高齢者を対象に介護予防のために開かれたものであったが、現在は、介護認定を受けている一部の人（要介護でなく、要支援と認定されている人）も参加できる。宇治町では、月に1回、第2水曜日に地域市民センターで開いている。参加者は健康講話を聞いたり、ゲームをしたり、健康体操をしたりする。寿会というボランティア団体が宇治町にあり、ミニデイサービスの運営を支援している。寿会の会員が自分で地域市民センターに来ることができない高齢者を送迎したり、ミニデイサービスで高齢者に提供する料理を作ったりしている³⁾。

最後は、老人クラブである。高齢者は老人クラブに加入し、趣味や教育の活動、健康づくりの活動、草取り作業や清掃作業のような社会奉仕活動を一緒にする。

5.5 高齢者の暮らしを守る独自のくふう

宇治町では、高齢者が暮らしやすくするための独自のくふうをしている。宇治町では、一人暮らしの世帯や高齢者夫婦のみの世帯が多い。高齢者だけの世帯では、緊急連絡先、かかりつけの病院、常時服用薬、血液型などが書かれた紙の入ったカン（緊急救急キット）を冷蔵庫の中に入れておくことになっている。そして、高齢者が病気などで倒れた時、救急隊員などが近親者へ連絡して、高齢者の病院への入院がすみやかにできるようにしている。また、宇治町の町内ごとに

住民の名前を並べた電話帳を独自に作成している。そして、同じ町内の住民どうしが電話連絡をしやすいようにしている。ところで、宇治地域まちづくり推進委員会が2015年に決めた重点的に取り組む基本計画の1つは、高齢者等が安心して生活できる生活基盤の整備であった。緊急救急キットや宇治町独自の電話帳はこの基本計画を実現するために導入されたわけではないけれど、基本計画に符合する制度である。

5.6 高齢者の人間関係

高齢者は、次の5つの理由から、親密な人間関係を宇治町の中で持っている。第1に、農村では、親族が近所に住んでいることが多いことである。第2に、宇治町の暮らしは、住民の助け合いによって成り立っていることである。葬式を出すときは町内の住民が助けしており、祭りは住民の助け合いでおこなっている。また、小学校や公園の清掃などを一緒におこなったりする。町内の人々とは頻繁に助け合うので、たいてい町内の人々を結婚式に招待する。第3に、一部の宇治町の高齢者は宇治雑穀研究会に加入して作業を一緒におこなったり、中心地区にある宿泊施設で一緒に働いたりしている。第4に、前述した娯楽や交流のための集会や集団が宇治町内にあり、多くの高齢者がそれに参加し、体操やゲームなどを一緒にしている。第5に、多くの高齢女性は、若かったとき、宇治町にある縫製工場と一緒に働いていた。これらの理由から、高齢者は宇治町の中で親密な人間関係を持ち、高齢者はお互いによく知っている。

人間関係が親密であるために、高齢者は宇治町で暮らしやすい。まず、近所の住民は一人暮らしの高齢者の住宅をときどき訪問し、安否確認をしている。次に、近所の住民が高齢者の生活を助けている。例えば、一人暮らしの高齢者や夫婦のみの高齢者は足が悪く、ゴミをゴミの回収場所まで持って行けなかったりした場合、近所の住民がゴミを回収場所まで持って行ってあげる。住民は高齢者へこうした支援を日常的におこなっている。ある元気な高齢女性は、「(宇治町では、) どうにもならない高齢者がいたら、近所がほっておかない」と言っていた。最後に、ボランティアが高齢者のために移送サービスや雑事の代行サービスなどをおこなう仕組みがある。これについては、前述した。これらの理由から、高齢者は宇治町で暮らしやすい。

5.7 高齢者が宇治町に住み続ける理由

宇治町には商店や生活関連施設があまりない。それにもかかわらず、多くの高齢者がそこに住み続けている。その理由を探るために、筆者は2017年に高齢女性

に聞き取り調査を実施した。そのとき、高齢女性たちは、次の5つの理由をあげていた。

第1に、自然環境がよいことである。宇治町は自然に囲まれて、静かである。また、空気がきれいである。

第2に、宇治町の人間関係である。高齢者は宇治町の中で親密な人間関係を取り結んでおり、近所の住民にいろいろと助けてもらえる。

第3に、高齢者は宇治町に居住していれば、自分が果たす役割があることである。高齢者は畑で野菜を作ったり、草むしりをしたりできる。そして、野菜の成長を見て楽しむことができる。子ども夫婦と同居するために都会に移り住むと、そうしたことができなくなってしまう。

第4に、先祖から引き継いだ住宅・田畑・墓が宇治町にあることである。「家制度」の考えから、高齢者はそれらを自分の世代で絶やしてしまうのではなく、自分の子どもに引き継いでもらおうとしている。そのために、高齢者は宇治町に住み続けて、住宅・田畑・墓を守っているのである。

第5に、都会に住む子ども夫婦と住むと、子ども夫婦に気遣いをしないといけなかったり、子ども夫婦に迷惑をかけてしまったりすることである。都会の住宅は手狭であるので、高齢者が別棟に住んだり、食事や風呂を子ども夫婦と別にしたりすることはできない。高齢者は都会に住む子どもと同居すると、遠慮して窮屈な生活をしなければならないから、宇治町に住み続けているのである。また、子ども夫婦と同居すると、高齢者は子ども夫婦に迷惑をかけてしまい、心苦しいと感じるので、宇治町に住み続けているのである。ある一人暮らしの高齢女性は、「一人暮らしがあんき(気楽)でいい。(別居している子ども夫婦に)迷惑をかけられない」と言っていた。

こうした5つの理由から、高齢者は暮らせる限りは、宇治町に住み続けようとしている。

5.8 将来の暮らし方

筆者は2017年に宇治町の高齢女性に聞き取り調査を実施したが、そのとき、彼女たちは将来どうするのかについて語っていた。「別居している子どもに迷惑をかけられないから、高齢者施設に入ることになる」のように、将来の見込みを明確に語る一人暮らしの高齢女性がいた。けれども、多くの一人暮らしの高齢女性はそれを語らなかったり、「(自分が動けなくなったら、別居している)子どもがどうにかしてくれる」とか「先のことは分からない」というように将来の見込みがあいまいであったりした。

ところで、かつて就職のために宇治町の外へ出てい

った子どもが退職などをきっかけに実家に戻って、高齢の両親あるいは親と同居している世帯が宇治町にある。このように、子ども（夫婦）が実家に戻って高齢の両親あるいは親と一緒に住むのであれば、高齢者は宇治町に住み続けることができるが、そうでなければ、高齢者はいずれ都会に移動して子ども（夫婦）と同居するか、高齢者施設に入居すると予想される。

6 要約

本稿では、中山間地域にある農村である岡山県高梁市宇治町に住む高齢者の暮らしを紹介した。要点は、次の11点である。

（1）高度経済成長期から、中山間地域の農村では過疎化と高齢化が急激に進んでいる。2020年の宇治町の人口は503人であるが、これは1955年の人口の20.7%である。そして、65歳以上の人口の割合は、2020年に55.9%となった。人口が減少したために、宇治町では商業施設や生活関連施設が少なくなった。

（2）2020年には、宇治町では66人が農業に従事していたが、そのほとんどは高齢者であった。過疎化や高齢化のために、耕作放棄地が増えている。

（3）宇治地域まちづくり推進委員会は、宇治町がこれから重点的に取り組むべき事業計画の基本を2015年に決定した。人口が減り、高齢者が増えたために、宇治町のマンパワーが少なくなったので、同委員会は移住促進策を強化したり、従来おこなってきた事業を中止したり、簡素化したりすることにした。また、高齢者が増えたので、高齢者が宇治町で暮らしやすくするための仕組みを作ることにした。

（4）宇治町では、直系家族世帯が減り、核家族世帯や単独世帯が増えている。2020年には、65歳以上の人がいる185世帯のうち、核家族世帯が48.6%であり、単独世帯が32.4%である。そして、夫婦のみ世帯や単独世帯の合計は61.1%である。子ども夫婦と同居する高齢者は、子ども夫婦に気遣いをしながら暮らしている。

（5）2016年と2017年に実施した「宇治町調査」では、65歳から79歳までの高齢女性は31.9%が子ども（夫婦）と同居していた。高齢女性は子どもと同居していなくとも、少なくとも1人の子どもはたいい近くに居住していた。そのために、子どもと同居していなくとも、高齢女性は安心感を持って暮らしていた。

（6）「宇治町調査」では、自動車を運転する高齢女性は65.2%であり、自動車あるいはバイクを運転する高齢女性は73.9%であった。自動車を運転する高齢女性は自ら自動車を運転して市街地に行き、買い物や病院・診療所への通院をしていた。そこで、自動車を運

転する高齢女性は宇治町に住むことに不便を感じていなかった。

（7）宇治町には、高齢者が生きがいのために一緒に働く集団がある。また、高齢者の娯楽や交流のために、いくつかの集会や集団がある。

（8）万一のときに備えて、高齢者だけの世帯では、緊急連絡先、かかりつけの病院、常時服用薬、血液型などが書かれた紙の入ったカンを冷蔵庫の中に入れておくことになっている。また、近所の住民と緊密に連絡を取り合えるように、宇治町の電話帳を独自に作成している。

（9）宇治町では、人間関係が親密であり、近所の住民が高齢者を見守ったり、助けてあげたりする。そこで、高齢者は宇治町で暮らしやすい。

（10）次の5つの理由から、高齢者は宇治町に住み続けている。①自然環境がよい。②高齢者は親密な人間関係を取り結んでおり、近所の住民から支援を受けられる。③野菜を作るなど、高齢者は役割を持つことができる。④先祖から相続した住宅、田畑、墓がある。⑤もし都会に出て子ども夫婦と同居すると、子ども夫婦に遠慮をしたり、子ども夫婦に迷惑をかけたりしながら、生活することになる。

（11）宇治町に住む高齢者は、多くが明確な将来の見込みを持っていなかった。仕事のために宇治町の外に出ていった子ども（夫婦）が戻って高齢者と同居するのでなければ、高齢者はいずれ都会に移動して子ども（夫婦）と同居するか、高齢者施設に入居することになるだろう。

宇治町では人間関係が親密であり、高齢者は周囲の人々からさまざまな支援を受けることができる。こうしたこともあって、宇治町には多くの高齢者が住み続けている。近年、過疎化と高齢化がいつそう進行している。そのために、従来のやり方では宇治町の住民の生活を維持することがむずかしくなった。そこで、宇治地域まちづくり推進委員会は移住者を受け入れる施策を強化したり、事業を取りやめたり、事業を簡素化したりするとともに、高齢者を支援する仕組みを作り上げた。こうして、住民は宇治町での暮らしを存続させようと努力している。それに加えて、高齢者の子どもの居住場所に注目すべきである。宇治町には单身や夫婦のみで生活をしている高齢者が多いけれど、そうした高齢者の子どもは少なくとも1人が40キロ以内の場所にたいい住んでいる。

注

1. 宇治雑穀研究会は、2020年に農林水産省主催の豊かなむ

- らづくり全国表彰事業で農林水産大臣賞を受賞した。
2. 社会福祉協議会は、それぞれのふれあいサロンの運営に最大で年間3万円の助成金を支出している。これは、社会福祉協議会の会員が納める会費を財源としている。
 3. 社会福祉協議会はミニデイサービスへ助成金を支出している。1回あたりの助成額は、参加者に900円、ボランティアに500円である。参加者は1回あたり500円を支払う。ミニデイサービスは、これらの資金によって運営されている。社会福祉協議会の助成金の財源は、高梁市役所が社会福祉協議会に支給する交付金である。

引用文献

1. 野邊政雄, 2020, 「農村に住む高齢女性の食料品の調達方法と病院・診療所への通院方法」『厚生の指標』67(11): 35-9.
2. 藤井和佐, 2011, 『農村女性の社会学--地域づくりの男女共同参画』昭和堂.

付 記

- (1) 2019年からコロナウイルスが流行したために、宇治町の住民の活動が低調となっている。本稿では、それ以前の状況を説明した。
- (2) 宇治地域まちづくり推進委員会の活動は、次のサイトで写真とともに紹介されている。「備中宇治彩の山里」(<https://uji-irodori.info/>)
- (3) 宇治雑穀研究会の活動は、次のサイトで写真とともに紹介されている。「推し名物まつり」(https://www.ja-hareoka.or.jp/oshi_matsuri/21/) および「もち麦に夢を託し、生産者の生きがいと地域活性化をめざす」(<https://www.jeinou.com/manager/2021/05/06/090500.html>)

謝 辞

宇治地域市民センターの館長の大場基成氏と事務局長の中曾まゆみ氏には原稿に眼を通して、誤りを訂正していただきました。お礼を申し上げます。

[2023. 10. 3 受理]

コントリビューター：山内 廣隆 教授
(ビジネス心理学科)